



福島第1原発事故で放出された放射性物質による放射線量の分布図（米エネルギー省提供）  
(1時間当たり125マイクロシーベルトを超える地域が赤色で示されている)

東京電力福島第1原発事故直後、米軍機を使って測定した原発周辺の放射線分布地図を米国側から提供されたにもかかわらず、日本政府はこの地図を公表せず住民の避難に生かしていなかったことが18日、判明。

放射線分布地図は米エネルギー省が軍用機で原発の半径45キロ圏を昨年3月17～19日にかけて測定。第1原発の北西方向約25キロにわたり、放射線量が1時間当たり125マイクロシーベルト以上の地域が広がっていることが確認された。8時間で一般の人の年間被ばく線量限度に達する高い数値。

米国は測定結果を昨年3月23日（日本時間）に公表した。それより前の同18日に経済産業省原子力安全・保安院に、同20日には保安院と放射線測定を担当する文部科学省に、それぞれ外務省を通じてデータが提供されていた。保安院と文科省は首相官邸や原子力安全委員会にも伝えなかった。政府内で情報を共有せず、住民の避難に生かさなかった。

原発から放出された放射性物質は北西方向に多く流れ土壌に沈着。事故当初、拡散状況が分からず北西側に避難した住民もあり、政府が迅速に公表していれば無用の被ばくを防げた可能性もある。

memo：米国が測定結果を公表した3月23日は、政府がSPEEDI試算を公開した日付である

memo : 米国が放射線量を測定し、公表する・した内容は既知

2011年3月24日 朝日新聞

原発の北西30キロ内、高い放射線量 米が空から測定

【ニューヨーク＝勝田敏彦】米エネルギー省(DOE)は22日、福島第1原子力発電所の周辺上空を飛ぶ米軍機などが測定した放射線量や地上のデータから、被災地域の地上の人が1時間あたりに浴びる放射線量を推定した結果を公表した。原発から北西方向に線量が高い長さ30キロほどの「帯」が広がっていることがわかる。

空中測定は17～19日に行われた。推定結果にある毎時125マイクロシーベルトを超える放射線量の帯は、地元自治体の観測でも高い放射線量が観測されている福島県の浪江町や飯舘村付近を通っている。

DOEは「調査した全域で毎時300マイクロシーベルトを超えておらず、放射線レベルは低い」としつつも、高い線量の帯の中では8時間ほどで、一般市民が年間で浴びる人工放射線の線量限度1ミリシーベルト(1ミリは1千マイクロ)を超える計算になる。

DOEは推定結果を随時更新し、ウェブサイトで公表する。

2011年5月2日 政府・東電統合対策室 会見

NHK記者 質問

「アメリカのDOE、アメリカの航空機からの測定は17日に既に始まり、3月23日にホームページに公開されている。アメリカのホームページによれば、日本側にも全て情報を提供しているといっている。その図を見れば、飯舘村のあたりまで汚染は明らか。17日の時点でそのようなことが明らかなのに、何故に何の行動もとらなかったのか。そういう不作為によって、どれだけの国民が余計な被曝をしたのか。安全委員会のひとはどのように考えているのか」

「3月17日時点で明らかに……。日本は主権国家だ。同盟国アメリカであろうと領土内で測定を許すからには、我が国の利益にならないといけない。その情報を得ていながら何もしなかったのはどういうことかと聞いている」